

『東方』二八一号より

絶代佳人一往学深

——楊貴妃文学の文学史

金 文京（京都大学）

中国の歴史的人物のうち日本でもっとも有名なものはだれかと聞かれたら、大多数の人はおそらく選択に窮するであろう。ただしそれは対象が男の場合であって、もし女性ということならば答えは簡単、それは楊貴妃にちがいない。一般的知名度や日本文学にあたえた影響の深さから言って、則天武后や西太后は逆立ちしても楊貴妃にはかなわないであろう。なにしろ日本には楊貴妃の墓まであるのだから。事情は中国でもおそらく同じである。いわゆる四大美人、というのは、西施、王昭君、貂蟬、楊貴妃のことらしいが、虚構の人物で、『三国志』関係の作品にしか登場しない貂蟬は論外として、歴代のさまざまな文学ジャンルに取りあげられた楊貴妃の多彩な人物像は、西施、王昭君のおよぶところではない。楊貴妃は中国でも、もっとも有名な女性にして史上最高の美人であるにちがいないであろう。

本書はその楊貴妃にまつわるさまざまな文学作品の研究であると同時に、それら楊貴妃文学を通じてみた異色の文学史を意図したものである。以下、本書の叙述にそって内容を紹介しながら、適宜コメントを加えることにしたい。

I 「総論」は、「長恨歌」から『長生殿』にいたる楊貴妃文学の歴史の簡単な見取り図である。ついでII「中晩唐における楊貴妃故事の展開」では、楊貴妃文学の出発点である「長恨歌」を避けて、楊貴妃と玄宗の愛の果ともいう

クリックすると次の段にジャンプします。

竹村則行著

『楊貴妃文学史研究』

A5判・四五六頁・研文出版・八、九二五円



べき華清宮にまつわる作品群に焦点がしぼられる。まずは玄宗と楊貴妃の華清宮行幸に少年時代、侍衛として扈從した経験をもつ韋応物の「驪山行」と「温泉行」が取りあげられ、楊貴妃の栄枯盛衰をまのあたりにした詩人の感慨が、ほぼ同じ時期に、民衆の中にまじって、いわば傍観者の冷徹な目で事態の推移をながめた杜甫の諸作と対比して述べられる。ついで杜牧の「過華清宮絶句」の「一騎紅塵妃子笑」における楊貴妃の笑いは、通説のように荔枝の実が早馬で届けられたことによる得意の笑みではなく、驪山にまつわる周の褒姒の故事を暗示することで、作者の諷刺の意を寓したものであることを論じる。次は複数の作者が比定される「華清宮、和杜舍人」詩について、作者が実は張祜であることを、『文苑英華』の表記の不備にもとづいて指摘する。最後は中晩唐期における華清宮自体の零落とともに、実在の人物としての楊貴妃の記憶もうすれ、次第に伝説化してゆくさまを、関連諸詩の分析によってたどる。

総じて華清宮という場所とそれにまつわる詩人たちの印象の変遷を通じて、楊貴妃の人物像変化の背景を照射したもので、そもそも華清宮への行幸は冬であつて、「長恨歌」の有名な長生殿の場面自体が虚構であるとの指摘ともども興味深い。

Ⅲ「五代・宋における楊貴妃故事の展開」では、まずこれまであまり注目されて来なかった唐末五代の文人、黄滔の律賦「明皇迴駕經馬嵬賦」を紹介し、あわせて当時の「詠馬嵬詩」にふれる。これら晩唐の「詠馬嵬詩」は、直接には黄巢の乱による僖宗の蜀への蒙塵と馬嵬通過に触発されて作られたものであり、そこには安祿山の乱は楊貴妃の責任ではなく、唐王朝の衰退は運命であるとする晩唐詩人特有の認識が共通してみられる。なお律賦は唐代科挙で用いられた形式であるものの、黄滔の作はそのテーマから考えて科挙での作ではないとする著者の主張は首肯できるが、ただしこの作品は「程及曉留、芳魂顧跡（程は曉に及んで留り、芳魂跡を顧る）」の八字を韻として指定しており、このような押韻方法が当時の科挙出題の通例であつたことを考えれば、科挙自体ではないにせよ、模擬科挙的な競作の場での作品であつた可能性を考慮すべきであろう。ついで唐詩の選集である『三体詩』の巻頭に、宋人である杜常の「華清宮」が収められている問題について、日本の五山僧の注釈などをも参照しつつ、『万首唐人絶句』と同じような宋代の唐詩編纂の杜撰さが指摘される。ちなみにこの詩の第二句「曉乘残月入華清」は、『三体詩』本のみ「曉風残月入華清」とするが、これはおそらく柳永の有名な「雨霖鈴」詞の「楊柳岸、曉風殘月」に影響されたものである。たんに編纂が杜撰だけでなく、詩句自体が変容している点が興味深い。次に宋代の小説として後の楊貴妃文学

トップページにもどる

に大きな影響をあたえた「梅妃伝」と「楊太真外伝」について、通行本と原本との比較を通じて、通行本は後世に増補されたものであることを明らかにし、特に虚構の人物である梅妃の創出が、その後の楊貴妃像の展開の契機となり、嫉妬する楊貴妃という新たな人物像を作り出した点が強調される。最後は元曲「梧桐雨」について、その中の玄宗が梧桐を撃つ場面が、当時流行の画題であつた「明皇擊梧桐図」と密接な関係にあり、かつ作者の白仁甫と親しかつた元好問の周囲でこの図についての題画詩が多く作られていたことが指摘される。著者も述べるごとく、『輟耕録』におさめる金代の「院本名目」に「擊梧桐」があるが、画題とこの時代の演劇のテーマが多く共通することは、宋末元初、鄭思肖の「所南翁一百二十回詩集」などを見てもわかるであろう。

Ⅳ「明・清における楊貴妃故事の展開」は、梅妃を主人公とする明・呉世美『驚鴻記』と楊貴妃文学の集大成ともいべき清・洪昇『長生殿』についての考察である。著者はすでにこの二つの作品について、詳細な注釈である『驚鴻記校注』（九州大学文学部『文学研究』九〇一九四号）、『長生殿箋注』（中山大学の康保成教授との共著、中州古籍出版社、一九九九）をはじめ多くの論考を発表しており、この部分は本書の白眉であると思える。まず『驚鴻記』については、現存する二つのテキスト、『新刻驚鴻記』（大谷大学蔵）と『標註驚鴻記』（古本戯曲叢刊二集）を詳細に比較し、前者がより早いテキストである可能性を示し、さらに清初の褚人穫の小説『隋唐演義』において、『驚鴻記』の文句が大量に引用されている事実を明らかにする。小説の中に戯曲を引用する例は『金瓶梅』などにも見られるが、『隋唐演義』では、小説本文の中に『驚鴻記』の文句が、

それとはすぐにわからぬかたちで散りばめられており、清代初期における小説と戯曲のジャンル間の交流を考えるうえで、きわめて貴重である。その発見は、『驚鴻記』を熟読玩味した著者ならではの功績であろう。

ついで『長生殿』については、作者、洪昇の詩集の中の七夕詩に着目し、特に「七夕、閨中作四首」によって、七月一日生まれの洪昇が、幼馴染の従妹で七月二日生まれ、黄蘭次と二十歳の年のまきに七夕の日に結婚したこと、したがって七夕が洪昇にとって個人的に特別な日であったことを指摘し、そこから『長生殿』の七夕の誓いの場面の特別な意味を読み取ろうとする。『長生殿』における情の強調は、作者個人の経歴とも密接にかかわっていたのであった。さらに「梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像」は、楊貴妃についての醜猥な言説を一掃したはずの『長生殿』が、なぜ梅妃を登場させて嫉妬する楊貴妃を描いたのかという問題について、さまざまな考察を行なったものである。最後に『長生殿』における季節の推移」は、物語の展開を季節の推移の中でえがいた「長恨歌」にならって、『長生殿』でも春の出会いから秋の別れまで、季節の推移によって筋を進行させ、そのために劇中に引用した玄宗の詩の字句を一部改めるなどの処置まで取られている点が指摘される。この点は、唐の元稹の伝奇小説『鶯々伝』に取材した金の『董西廂』や元稹の『西廂記』が、やはり季節の推移の中で物語を展開させ、『鶯々伝』のストーリーと字句をそれにあうように改め、のち明代に『西廂記』が「崔氏春秋」、「関氏春秋」の別名を得たことと軌を一にするものであり、戯曲文学のあり方を考えるうえで示唆的である。

V 「近現代における楊貴妃故事の展開」は、近代の文豪、魯迅に、楊貴妃を主人公とする戯曲の構想があり、しかも

今月の『東方』

トップページにもどる

書評目次へ

そこでは楊貴妃と玄宗の愛情は長生殿での密誓の段階ですでに冷めていたという、いかにも魯迅らしいシニカルな設定であったことを、許寿裳、郁達夫など関係者の証言によって指摘するとともに、それらの証言にもとづいて、腹案におわったこの作品の内容を推測、再構成し、さらにこの作品のための取材を兼ねた一九二四年夏の魯迅の西安旅行の経緯を詳しく考証することによって、西安から帰った魯迅がこのテーマに急速に興味を失っていた原因が考察される。評者も実はかねがねこの問題に多大の関心をもっていたのであるが、西安までの劣悪な旅行環境、西安での軍閥との間の不愉快な体験、なканずく現実に目にした当時の西安の状況が、魯迅が思い描いた唐の長安とはあまりにもかけ離れていたことが、創作放棄の理由であるとの著者の説は説得的である。ただしそもそも魯迅がなぜ楊貴妃に興味を抱き、また玄宗との愛情が冷めていたという一種奇抜な発想をもつに至ったのかは、なお謎として残ったように思う。著者のさらなる見解を望むことにしたい。

以上、本書は楊貴妃文学の個々の作品についての考察に新境地を開いたばかりでなく、楊貴妃という一人物を軸として、唐代から近代にいたる中国文学の流れの一断面をあらわかに示し、文学史のひとつの可能性を開拓しようとした意欲的な試みである。考えてみれば、このように歴代の文学作品に取りあげられた特定個人の人物像の変遷によって文学史を構築するという試みが可能なのは、中国ではおそらく楊貴妃のみである。本書は、楊貴妃文学の研究に长年携わってきた著者会心の作であろう。

それにしても絶代の佳人を研究対象とする著者の研究生活はうらやましいかぎりである。今後とも著者の研究上の艷福を祈りたい。